

樋口 隆弘 氏の学位審査結果の要旨

主査：福永 幹彦

副査：日下 博文、木下 利彦

自閉症スペクトラム児（ASD）は対象物への視線の向け方に独特な特徴があるとされている。この特性の詳細な解析、さらには学習障害との関連を検討するため、教室での学習場面を動画で示し、教師の顔、指差し、指差し対象物、教室上部の壁の4箇所を関心領域と設定。視線停留時間と共同注視を定型発達児と比較検討した。結果として、ASD児は、無意味な壁への視線停留時間が有意に長く、動画開始時に教師の顔や指、指差しの対象をみていることが少なく、指差しの対象に視線を向けるまでに時間がかかっていた。ASD児では視覚感覚過敏があるため、刺激の少ない壁に視線が停留しがちだったことが原因と考えられた。壁への停留時間は、ASD児と定型発達児の鑑別に有用な指標となる可能性がある。またASD児は授業場面で指差し対象物に視線が向きにくいことが、このことは学習にとって不利である。ASD児へは視覚刺激の少ない方法で対象物を差し示すなどの工夫で、学習効果が高まる可能性が示唆された。